

早稲田大学大学院日本語教育研究科

## 修士論文概要書

### 論文題目

中国語母語話者によるフォーカス発音の韻律的特徴と  
意図伝達に影響する要因

趙 氷清

2016年9月

## 第 1 章 序論

本研究の問題意識は筆者が大学時代に中国でスピーチコンテストに参加した経験から生まれた。中国語母語話者のスピーチを聞くと、多くの発表者は声の抑揚が激しいため、一文の中にフォーカスが多く聞こえ、聞き手が疲れやすく、内容も理解しにくい。また、音を伸ばして強調するケースが多く、フォーカスの表現が大きさで不自然であると感じた。日本に留学に来てから、ゼミ発表や学会発表などで中国人留学生の発表をよく耳にするが、やはり伝えたい内容が音声上うまく伝達できていないことが多いことが気になった。このようなフォーカス発音の問題により彼らの能力が低く評価され、自己実現にも悪影響が出る恐れがあると気づいた。

日本語学習者が多様化している中、日本社会でより高度な社会参加と自己実現を目指す学習者は、スピーチや学会発表などの場面で日本語を使って情報発信をする事が多い。しかしながら先行研究から、「音声面の技能が低ければ発表内容が正確に伝わらない」ことがわかり(三浦・深沢 1998)、その原因のひとつとして、窪菌(2008)はフォーカス発音の重要性を指摘した。学習者のより高度な自己実現のために、一番伝えたい内容であるフォーカスの発音の研究が必要とされるが、現状では学習者のフォーカス発音について未解明なことが多い。そのために、本研究では、中国語母語話者を対象として、フォーカス発音の韻律的特徴と意図伝達に影響する要因を解明することによって、フォーカスの音声指導ないし日本語音声教育に提言する。

本研究の目的は中国語母語話者がフォーカスを発音する際の韻律的特徴を明らかにし、そして日本語母語話者の判定を踏まえた上で、フォーカス発音の意図伝達に影響する要因を明らかにすることである。さらにその上で、今後の日本語音声教育に提言する。そのために以下の3つのリサーチクエスション(以下 RQ)を設定した。

**RQ1** 中国語母語話者が日本語でフォーカスを表現する際に、発音にどのような韻律的特徴があるか

**RQ2** 中国語母語話者による日本語母語話者によく伝わるフォーカス発音と、伝わりにくい発音に、それぞれどのような韻律的特徴があるか

**RQ3** 中国語母語話者のフォーカス発音の意図伝達に影響する要因は何か

## 第 2 章 先行研究

まず、フォーカスに関わる音声学の諸概念を概観した。「フォーカス」の定義に関して、郡(1997)と窪菌(2008)の研究に基づき、本研究の中では「話し手が聞き手に対して情報伝達の最も伝えたい内容」と定義する。プロミネンスとフォーカスの関係について、加野(1996)、郡(1989b)、宇津木(2004)、窪菌(2008)をまとめると、「フォーカス」は「話し手の一番伝えたい部分」という意味論上の概念であり、これに対して「プロミネンス」は「フォーカス」を表現する一種の発音法であるということが分かった。韻律的特徴という概念について、本研究で使用する「韻律的特徴」は郡(2011)の定義に従い、その中から音の高さ、長さ、強さ、ポーズの特徴を取り上げて分析する。

次に、日本語のフォーカス発音、中国語のフォーカス発音、中国語母語話者の日本語のフォーカス発音についての先行研究をそれぞれ整理した。主に以下のことが分かった。

- 日本語ではフォーカスを表現する際に、ピッチ(高さ)の変化が一番よく使われ、その次に長さ、強さ、ポーズといった音声項目も併用される(郡 1989b, 杉藤 1991, 前川 1998, 窪菌 2008)。
- 中国語ではフォーカスを表現する際に日本語とは違い、主に持続時間の変化が利用される(楊 2011, 松本 1986, 馮 2007)。
- 中国語母語話者による日本語のフォーカス発音には以下のような特徴がある。
  1. フォーカス語に後続する語群のピッチを抑えない(廖 2010)。
  2. 非フォーカス語のピッチがフォーカス語より高くなる場合がある(張 2012)。
  3. 中立発話とフォーカス発話のピッチ曲線が類似する(楊 2011)。

しかし、以上の中国語母語話者のフォーカス発音に対する先行研究はフォーカスに関わる諸音声項目の中からピッチ(高さ)の問題しか扱っていない。母語転移の面を考えると、長さ、強さ、ポーズなどの音声項目にも母語の影響が見られる可能性があり、これらの音声項目も視野に入れる研究が必要とされるが、管見の限り見当たらない。さらに、中国語母語話者の発音に対して日本語母語話者はどのように判定し、意図伝達に影響する要因は何かについても解明する必要があるが、それについての研究もいまだにない。それに従い、本研究は以上の先行研究を踏まえた上で、中国語母語話者のフォーカス発音の韻律的特徴を高さ、長さ、強さ、ポーズの 4 つの項目から分析して解明し、また日本語母語話者の判定を踏まえた上で、意図伝達に影響する要因を明らかにしたい。

### 第3章 調査 I 中国語母語話者によるフォーカス発音の生成調査

調査 I は中国母語話者によるフォーカス発音の生成調査である。本調査の目的は、RQ1 を解明することである。

本調査は、2015 年 10 月から 2016 年 1 月にかけて実施した。調査の協力者は調査時仕事や留学のため日本に在住している中国語母語話者 10 名である。音読の内容をよく理解してもらわないとフォーカス発音に支障が出やすく、また、上級になるにつれ、発表やプレゼンテーションでフォーカスをうまく発音したいと考える学習者も増えると考え、協力者を「N1 資格を持ち、かつ日本語による発表の機会がある者」を基準として選定した。調査文は 4 つの文のそれぞれの前部フォーカス、後部フォーカス、中立発話の合わせて 12 の読み方である。調査文を作成する時、フォーカスの位置、アクセント型、文節の長さ、内容などを考慮して作成した。生成調査の際に、「フォーカスが分かるように」と指示し、各調査文をランダム順で音読してもらい、録音した。調査後に音読の際の意識について簡単な事後インタビューを実施した。生成調査後、各協力者の音声データを SUGI Speech Analyzer(Ver2.1.0.4)で一文ずつ音響解析を行い、音声波形、ピッチ曲線、音圧曲線、広帯域スペクトログラムを抽出した。その上、高さの指標である F0 最大値、長さの指標である 1 モーラ長、強さの指標である音圧最大値、ポーズの指標である無音区間をそれぞれ測定し、算出した。分析の際に、統計分析と音響分析を使用した。

その結果、RQ1 の答えとして、以下のことが分かった。

全体的には、中国語母語話者はフォーカスを発音する際に、高さの変化、長さの変化、強さの変化、ポーズをそれぞれ使用する。その中で、長さの変化を一番よく使用し、その次に高さ、ポーズ、強さの変化も併用する。

具体的には、以下のような 10 点の韻律的特徴が見られた。

- 1) 平板式アクセントの語にフォーカスがあるとき、ピッチの上昇が困難である。
- 2) 語アクセントを変えることによってフォーカスを表現する。具体的に、フォーカスされた場合は起伏式、フォーカスされていない場合は平板式に発音する。
- 3) フォーカス部分以降の語群が抑えられない。
- 4) フォーカス部分が短い場合はフォーカス部分自体を、フォーカス部分が長い場合はそれに後続する助詞を高める。

- 5) 非フォーカス部分に後続する助詞も高く発音する。
- 6) 特殊拍や漢字語彙の語にフォーカスがある場合、リズムの崩れによりフォーカス部分が非フォーカス部分よりも短く調音される。
- 7) フォーカス部分が非フォーカス部分より顕著に長く発音される。
- 8) 高さの変化に依存せず、強さの変化を主に使用する。
- 9) フォーカス部分の文節内にポーズを置く。
- 10) フォーカスを表現するためのポーズが短くて不明瞭である。

#### 第4章 調査Ⅱ 日本語母語話者による音声判定

調査Ⅱは日本語母語話者による音声判定の調査である。本調査の目的 RQ2 と RQ3 を説明することである。

本調査は、2016年1月に実施した。本調査の協力者は東京所在の某大学に在学する大学院生の4名である。学習者は日常的にさまざまな出身地と背景の人と接することを考え、協力者の出身地や日本語教育背景を特に定めなかった。調査Ⅰの学習者の音声データを聞いてもらい、聞き取ったフォーカスの位置を判定してもらった。個人差を抑えるために、一つの音声につき、2名の判定者に判定してもらった。判定結果に基づき、①よく伝わったフォーカス発音、②伝わらなかったフォーカス発音、③フォーカスが多箇所にある発音の3種の発音を洗い出して分析し、よく伝わるフォーカス発音と伝わりにくいフォーカス発音の韻律的特徴を分析した。分析の際に統計分析と音響分析を使用した。

その結果、RQ2の答えとして、中国語母語話者による伝わるフォーカス発音には以下の韻律的特徴があると明らかになった。

- 1) フォーカス部分が基本的に非フォーカス部分より高く、長く、強く発音される。
- 2) フォーカス部分の後にポーズが置かれる。
- 3) フォーカス部分に後続する助詞が高く発音される。
- 4) フォーカス部分以降の語群の高さが抑えて発音される。

中国語母語話者による伝わりにくい発音には以下の韻律的特徴があると明らかになった。

- 1) フォーカス部分以降の語群の高さが抑えられない。
- 2) 非フォーカス部分に後続する助詞が高く発音される。
- 3) アクセントに誤用が見られる。

- 4) 非フォーカス部分がフォーカス部分より長く発音される。
- 5) 非フォーカス部分の途中あるいは後にポーズが置かれる。
- 6) フォーカス部分の前後ともポーズが置かれない。

RQ3 の答えとして、中国語母語話者のフォーカス発音の意図伝達に影響する以下の要因が明らかになった。

- 1) フォーカス部分と非フォーカス部分に後続する助詞の高さ
- 2) フォーカス部分と非フォーカス部分の後のポーズ
- 3) フォーカス部分と非フォーカス部分の高さ(フォーカス以降の語群の高さが抑えられるか否か)
- 4) アクセント型の正否
- 5) フォーカス部分と非フォーカス部分の長さ

そして以上の要因がフォーカス発音の意図伝達における重要性の順位は後続する助詞の高さとポーズ>フォーカス部分と非フォーカス部分自体の高さ、アクセントの正否>フォーカス部分と非フォーカス部分自体の長さ>その他(強さなど)という順になっていることが明らかになった。

## 第 5 章 総合的考察と結論

本章では、3つの RQ の答えに基づき、総合的考察を行った。その上で日本語の音声教育に提言した。

総合的考察は①アクセントの正確性がフォーカスの意図伝達にもたらす影響、②文節末助詞をむやみに上昇することがフォーカスの意図伝達にもたらす影響、③「長さ」に見られる問題点がフォーカスの意図伝達にもたらす影響、④フォーカス以降の語群の高さが抑えられないことがフォーカスの意図伝達にもたらす影響の 4つの方面から行った。

日本語教育への示唆について以下の 3 点を提示した。

- 1) 「正確さ」の重要性の見つめなおし

従来の研究と指導では、中国語母語話者のフォーカス発音の問題点をイントネーション上の問題として捉えられがちであるが、本研究の結果から、アクセント型と特殊拍の発音問題など小単位の音声項目の習得が結局フォーカスの意図伝達に影響することが明らかになった。最近の音声教育でも、「流暢さ」に目を向けるようになったため、アクセントや特殊拍など一つ一つの小さな音声項目の正確さが疎かにされる傾向がある。本研究の結果を

通して、今の音声教育の「流暢さ」重視の風潮の中で、アクセントやリズムなどの「正確さ」の重要性をもう一度見つめなおすべきだと考えられる。

## 2) 体系的なフォーカスの音声指導の必要性

いままでの音声教育の中でフォーカスに特化した音声指導が少ないため、学習者が日本語でフォーカスを表現するとき、母語のフォーカスの方法をそのまま援用するか、日本語母語話者の話し方を真似するか、どちらの方法を採っていることが多い。しかし、本研究の成果からこの2つの方法とも発音上の問題を招くことが分かった。そのため、フォーカス発音の学習は放置して学習者の独学に任せてはならない。今後は、先行研究および本研究の成果を踏まえた上で、フォーカス発音を高さ(助詞の高さ、アクセント)、長さ(リズム)、強さ、ポーズなどいくつかの方面から体系的に指導することが必要である。

## 3) 中国におけるスピーチ指導への示唆

本研究の問題意識は筆者自身が中国で参加したスピーチコンテストの経験から湧いてきたため、研究結果も中国のスピーチ指導に還元したい。本研究の結果を踏まえた上で、今後のスピーチ指導の中で注意すべき点を提示した。

今後の課題として「学習者の発音時の意識と学習経験の分析」と「フォーカス発音指導の実践研究」の2点を提示した。

## <主な参考文献>

窪菌晴夫(2008)「プロソディの基礎研究と日本語教育」『日本語教育と音声』戸田貴子[編]くろしお出版,pp.101-116

郡史郎(1989a)「フォーカス実現における音声の強さ、持続時間、F0の役割」『音声言語Ⅲ』近畿音声言語研究会,pp.29-38

——(1989b)「強調とイントネーション」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院,pp.316-342

杉藤美代子(1991)「朗読音声における強調表現の音響的特徴」『大阪松蔭女子大学論集』28号,pp.1-13

楊詘人(2011)「中国人日本語学習者に見られる発音とイントネーション問題」『音声文法』杉藤美代子[編]くろしお出版,pp.123-136

廖娟慧(2010)「日本語のフォーカス生成について—中国人上級日本語学習者を中心に—」『日本語教育研究』56,pp.71-78